

5 年 2 組

本当のこと

～自分たちで育てた小麦で調理をしたい～



わたしはまだあきらめたくないです



「わたしはまだあきらめたくないです」(Aさん)。自分たちの小麦づくりのこれからを考えて授業の中で、多くの子が、冒頭のような言葉を振り返りに綴っていました。この言葉が生まれてきた、経緯を記したいと思います。

社会科の学習で、北海道の小麦農家さん、青木村で無農薬のゆめかおりを育てている小麦農家さん、そして、長野市で農薬を使い、小麦を育てている小麦農家さん。様々な小麦農家の営みについて学んだ子どもたちは、そんな小麦農家の営みと自分たちの小麦づくりを重ね、「自分たちの小麦づくりでは農薬を使うのかどうか」を問題にしていきました。そして、

子どもたちは、農薬にかかわる様々な事実と向き合っていました。例えば、とあるパン屋の店主さんが昔、外国産の小麦粉を使ってパン作りをしたことで、外国産の小麦粉にかかっていた後農薬(あとのうやく:ポストハーベスト)の影響で、自身が小麦アレルギーになってしまったという事実子どもたちは新たに出会いました。Bさんは、そんな農薬の危険性を知り、「農薬を使わない安全な小麦の方がよいのではないかと考えていきました。しかし、Bさんは、「農薬を使わないことで小麦が病気になり、収穫量が減るのではないかと…」とも考え、授業の中で何度も何度も迷い悩む姿がありました。そんな中でBさんが出合った、「赤カビ」という小麦の病気の危険性。それは、「赤カビは収穫量が減るだけでなく、もし食べてしまえば人体にとって毒である」という衝撃な事実でした。そして、その赤カビが影響で、一昨年度、岩手県では800トンの小麦が廃棄された事実を知ったBさん。Bさんは、本当に「安全・安心な小麦とは何か」を真剣に考え、最後は「農薬を使った方がよいのではないかと改めて自分なりの判断をしていきました。Bさんのような考えをする子もいる中で、「まだ赤カビになっていないからこのまま無農薬でつくりたい」(Cさん)という考えや、「人体に影響のないような農薬はないのか?」(Dさん)、「農薬が1番かかっている皮の部分が入ってしまう全粒粉だから問題があるわけで、皮を使わなくていいような白い小麦の作り方を考えたらいい」(Eさん)といった考えもあり、農薬を使うかどうか、子どもたちは決断できずにいました。

そんな中で、突然飛び込んできた、長野県で3年ぶりに発せられた県内全域の赤カビ注意報。そして…恐れていたことがついに起こってしまいました。それは、赤カビが発生したかもしれないという可能性。きっかけは、畑を貸していただき、小麦の種まきの時も指導をしていただいた、農園の社長さんから「あれ赤カビじゃないかな」と心配の声をいただいたことでした。もし本当に赤カビが発生していたら…「全ての小麦が廃棄かもしれない」という現実。そんな現実を目の前にして、わたし自身が授業中に涙が止まらなくなってしまいました。今までやってきたことが全て無になってしまうかもしれないという虚しさ、やりきれなさ。そして決断できずに、ず



っと話し合っていてよかったのという後悔。何より、農薬を使うかどうかの話し合いが本当に必要だったのかどうかさえも問い直せずにはられませんでした。「どうしたらいいと思う?」と子どもたちに尋ねることしかできませんでした。

しかし、子どもたちはそんな現実にも前向きに向き合い、「まだあきらめたくない」という思いをもち、自分たちにまたできることはないかを考えていました。わたしにとっては、子どもたちの思いに救われた時間でした。子どもたちは、授業が終わると、一目散に畑に駆け出し、小麦の様子を見に行きました。それでも、



目視ではなかなか赤カビかどうか判断することができず、呆然と畑を眺めるしかない、子どもたちとわたしがいました。

その後、授業でお世話になった小麦農家さんにも実際に畑に足を運んでいただき、小麦の様子を見ていただきました。子どもたちは、「まだできることがある。これ以上、被害が広がらないように農薬をかけよう」と農薬を使う決断をしていました。しかし、小麦畑を見てくださった小麦農家さんは、小麦の様子を実際に見に来てくださった際、「あと1週間で刈り取りができそうな小麦。そこに農薬をかけても、ただ刈り取り時期が伸びるだけ。完成しすぎているから、農薬はかけない方がいい」と話されました。子どもたちが判断したことも、最終的にはちがう形での決着となりました。それでも、子どもたちはまだ自分たちできることがあると前向きに考え、赤カビの可能性のある穂の回収作業を行いました。

様々な思いをかかえながら、小麦の収穫は無事に終わりました。100 kg以上の小麦を収穫できたことを喜び子どもたち。子どもたちは、小麦作りの学習を以下のようにふり返りました。

- わたしたちにとって深刻な問題になった「農薬のこと」。一人一人が農薬に向き合い「まいたほうがいいんじゃないかな?」「まかないほうがいいんじゃないかな?」と考えながら、ひたすら農薬を使うかどうかの磁石ボード上の名前を何度もずらしました。しかし、最初から最後までCさんは農薬をまかないという決断をしていました。わたしはすごいと思いました。自分一人が農薬をまかないという理由を強くもっていたからです。わたしは5年2組全員で決めたことは正解だったと思います!!(Fさん)
- これまでいろいろな小麦農家を見てきたけど、それぞれ農薬を使ったり使わなかったりいろいろな育て方があることを知った。今まで食べ物を残したことがあったけれど生産者の農家や漁師などは頑張っているから残さず感謝して食べたい。(Gさん)
- 「小麦農家さんは、とてつもない勇気を持っているんだな。」と思った。なぜなら、小麦が全滅してしまうかもしれないという思いと、未来の自然の寿命が縮んでいくかということを決めなきゃいけないから。(Hさん)
- わたしは考えている時に、色々な方の話を聞いたり、みんなの意見を聞いて何回も農薬使うか使わないか迷いました。最後農薬をまくことに決めたと、農薬をまいて待つよりも、収穫したほうがいいから最終的にまきませんでした。最後はまかないことに決まったけど、ここまで考えられたのがすごいなと思いました。(Iさん)
- 最初は農薬を使わないと思ってたけど、後から赤カビのことを知って、使わないとダメだと思ってたけど、もう手遅れだと言われたから、赤カビの疑いがある穂をとって検査に出さなければいけませんでした。もし赤カビでもいい学びになったと思います。(Jさん)

畑を見てくださった小麦農家さんは、「農薬のことは、ぼくたちも毎年迷っています。迷いながら決断しています。子どもたちが、最後は決断できなかったっていう結論もありなんだと思います。というか、それが、ぼくたちと同じ、現実のことで、本当のことで、それが本当の学びなんだと思います」と語っておられました。自分たちにとって、考えずにはいられなかった本当のこと。そして、向き合った本当の現実。そこに子どもたちにとっての本当の学びがあったのだと、わたし自身も今、思っているところです。

子どもたちは、小麦を刈りとった後、はざかけ、脱穀、天日干しと最後までやれることをやり切りました。現在、専門の分析機関に小麦を送り、赤カビの検査を行っているところです。

